

# タンチョウ博士のお話

このコーナーでは、今年の春から秋にかけて長沼町にやってきた国の特別天然記念物のタンチョウについて、タンチョウ博士こと正富宏之（まさとみひろゆき）先生（専修大学北海道短期大学名誉教授）に教えてもらい、くわしく学びます。第1回はタンチョウを見る時のマナーについて考えてみたいと思います。

## ○おや、怪しいな？！

堤防上の道をワゴン車が1台、ゆっくり走っている。ぼくのいる舞鶴遊水地の草かげから250mくらい離れているので、別に気にしない。湿地の中へ、車が突っ込んでくるなんてことは、ないからね。

ここで簡単に自己紹介をしておこう。ぼくの名はタンチョウ。タンチョウヅルは俗称で、戸籍の名（標準和名）に“ツル”はつかない。個人（鳥？）情報なので、出身地は教えられないけど、“道産子”なのは確か。

水辺で餌をさがすとき、40cmぐらいまでの深さなら、足が長いので体をぬらさずにすむ。だけど、首も長くないと餌に届かない。だから長い足と長い首がぼくの特徴だ。

おや、車が止まった。窓が開いた。光る目玉のようなものが突き出されたぞ。ああ、カメラだ。気になるけど、まあ、がまんできる。頭だけ上げ、チラッと目にとめてから、餌さがし再開だ。

あれ？今度は車のドアが開いた。要注意だ！ほら、やっぱり。車から人が降りた。その場でカメラをぼくへ向けている。ちょっといやだな！警戒を怠らず、少し遠くへ離れよう。今いるところは餌がたくさんあるけれど、しかたない。

おや、ぼくが少し離れたので、今度はカメラを持って土手を降りてきた。これは危ない。餌を探しながらでは、草かげで人の動きがよく見えないから、体を立て、首を伸ばして見張ることにしよう。

ふむ。まだ近寄ってくる。あの人は、ぼくが体を立て、首を伸ばして強い警戒姿勢をとっているのに気づかないのかな？

もう限界だ。ぼくはゆっくりとカメラマンに背を向け、飛ぶために助走を始めた。これでまた、食事は中断か。迫力あるぼくの写真を近くで撮りたい気持ちも分かる。でも、結局、彼の行為はぼくを遠くへ追いやるだけだ。ぼくはぼくで、せっかく餌のたくさんあるこの遊水地で、ゆくゆくは新居を構え、子育てしたいと思ったのに、これでは安心して暮らせないと、警戒心を持ってしまった。ここは初めて来たところだから、何ごとにも神経質になっているのは仕方ないことだ。空から見下ろすと、遊水地の別の水溜りに、水ぎわでカメラを構えている人がいた。あまり人を恐れない鳥たちはよいけれど、同じところを使う別の神経質な鳥を、その人は追い払っていることに気づいていないようだ。

それに、珍しいからといって、畑のあぜや、農作業用の道をふさぐように車を乗り入れ、鳥たちを追い回すのは、身勝手にもほどがある。そこは農家の人たちの仕事場なのだ。自分の仕事場や敷地へ勝手に入り、うろろろされて気を悪くしない人がどこにしよう。それに、靴やタイヤについた菌で作物が病気になることもあるらしい。

空を飛びながらぼくは思った。遠くから、ぼくたちをそっと見守ってほしい。それが皆さんへのお願いだ。そして、いつかこの遊水地に住み、地域の人たちが温かくぼくたちを迎えてくれたことに、いささかでも“恩返し”したいものだ。（文：正富宏之）



「大丈夫」



「少し気になる」



「近寄らないで」



次回からは、皆さんの質問に正富先生が答えるコーナーがスタートします。お楽しみに！